

High TIPとの使用経験を踏まえて

実臨床から考えるALPHA TIPの有用性

監修

あきこクリニック 院長

田中 亜希子 先生

略歴

1995年 東京大学医学部医学科卒業
東京大学医学部附属病院産婦人科勤務
1998年 大手美容外科副院長就任
2002年 同美容外科美容皮膚科部長就任
2007年 同美容外科診療部長就任
水戸院院長・千葉院院長歴任
2009年 あきこクリニック開院 院長就任
2013年 医療法人社団 英僚会設立 理事長就任
あきこクリニック院長 兼務
2020年 金山美容クリニック顧問医師
2022年 学術医術研鑽会 あきラボ® 設立
2024年 麗ビューティー皮フ科クリニック技術指導医
2024年 医療法人社団天祐会皮膚科形成外科グループ顧問医師
2026年 医療法人ラナンキュラス会理事



DENSITYのHigh TIPは、これまで当院におけるタイトニング治療の中心として多くの症例で使用し、良好な治療成績を得てきた。その後、ALPHA TIPの登場により実臨床で使用経験を重ねる中で、施術効率や熱分布、仕上がりなどにおいて多くの利点を実感し、現在では当院における主な治療チップとしてALPHA TIPを選択する機会が増えている。もちろんHigh TIPにも適した症例は存在するが、日常診療ではALPHA TIPの特性を活かすことで、より効率的かつ質の高い治療が可能であると考えている。

本稿では、当院がHigh TIPからALPHA TIPへ移行した背景と、その過程で実感したALPHA TIPの特徴や有用性について、実際の症例を交えながら紹介する。

ALPHA TIP導入による治療の変化

当院では、これまでDENSITYで施術を行う際はHigh TIPを用いたタイトニング治療を中心に行ってきた。High TIPはモノポーラRFとバイポーラRFを組み合わせたSequential Heating Technologyにより、即時的な引き締め効果と長期的なコラーゲンリモデリングを両立できるチップである。

その後、ALPHA TIPの導入により、日常診療におけるチップ選択は大きく変化した。ALPHA TIPは電極設計が見直され、よりエネルギーが広範囲に均一に分布し、真皮から脂肪層まで途切れることなく熱作用を与えられるようになった。その結果、前頬のたるみや口横のもたつきなどに対して、よりアプローチしやすくなったと感じている。さらに、クーリングシステムの強化により、高い出力を維持したままでも施術時の痛みや熱感が軽減され、患者負担の軽減につながっている。

また、同じ300ショットで施術した場合でも、High TIPでは

約30分を要していた施術が、ALPHA TIPでは約20分程度で完了するようになり、施術効率も向上した。実際に施術を受けた当院スタッフからも、ALPHA TIPの方が痛みが少なく、チークトップのリフトアップや口横のすっきり感を実感したという声が得られている。



症例供覧

症例1、症例2ともに同一パラメータで施術を行った。なお、症例2は、医師自身がALPHA TIPの使用感や治療効果を評価する目的で施術を受けた症例である。

症例1の患者は左頬が右頬と比較してボリューム感に乏しく、全体的にミッドチークのリフトアップを希望された。頬部はレベル3.5で1パス照射後、レベル4.0で追加照射を行い、左右各135 shot、合計270 shotを照射した。額および顎下はレベル2で各15 shot照射した。疼痛軽減を目的としてブロック麻酔を施行し、オイルを十分量塗布したうえで照射を実施した。患者からは「いつもより痛みがかなり少なかった」との評価が得られた。照射時には、チークトップの挙上を意識し、チップを皮膚に対して上方へ押し上げるように保持しながら照射を行った。また、フェイスラインおよびこめかみではガーゼを用いて皮膚を斜め上方へ牽引しながら照射を行った。施術直後にはチークトップの挙上が確認され、患者からもフェイスラインや口周りのもたつきが改善したとの評価が得られた。

症例1



症例2



まとめ

施術1か月後には、症例1の患者様ならびに医師自身も「顔が小さくなったと言われることが増えた」と周囲からの反応の変化を実感した。また、最も効果を実感したのは施術1か月頃であった。施術翌日は軽度の腫れ感を認めたものの、その後速やかに軽快し日常生活への支障は認めなかった。

今回、患者様だけでなく医師自身もALPHA TIPによる施術を体験したことで、施術時の疼痛が少ないことに加え、チークトップのリフトアップやフェイスラインの改善など、高い治療効果を実感することができた。実際に施術を受けることで、術者としてだけでなく患者の立場からもALPHA TIPの有用性を改めて認識することができた。

今後も症例を積み重ね、エビデンスを蓄積することで、より効果的な照射プロトコルの確立につなげていきたいと考えている。

* * *

これらの情報は学術的知見の共有を目的としたものであり、特定の製品の販売促進や広告を意図するものではありません。